

就業体験が就職後の初期キャリア獲得度に及ぼす効果の検討

畠 一樹

(徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門)

1. はじめに

現在、キャリア支援分野において就職ミスマッチが発生し、早期離職（3年で3割が離職）により社員が定着しないことが社会問題となっている。その解決策の1つとして挙げられるのが、就職後に「本人が納得のいくキャリアをつくり上げていくために必要な考え方や姿勢が備わっている状態」で働くことである。本研究では、そのような納得感がある状態について仕事理解、自己理解、キャリア積極性の3つの要素から構成される指数である「初期キャリア獲得度」¹⁾に注目する。初期キャリア獲得度は大学在学中のキャリア教育、キャリア形成および就職活動などが影響する。そこで、今回は就業体験が前提となるインターンシップを実施する正課授業を対象にアンケート調査を実施し、就業体験が初期キャリア獲得度に及ぼす影響を分析するとともに、今後のキャリア支援の在り方を検討した。

2. 分析手法

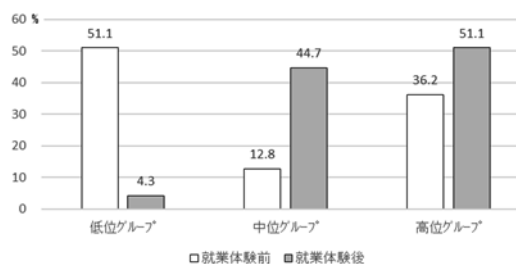
本研究では、本学の2019年度に専門教育で開講されたキャリア教育（対象学部：理工学部および総合科学部、学年：3年次、科目名：短期インターンシップ、履修者数：148名）を履修した学生に対するアンケート結果を分析対象とした。アンケートの質問内容は初期キャリア獲得度に影響を及ぼす項目¹⁾を採用し、択一式回答とした。また、調査時期は5日間以上の就業体験の実施前後とし、有効回答者数（回答率）は94人(63.5%)であった。

3. 分析結果および考察

(1) 初期キャリア獲得度指数¹⁾の変化

初期キャリア獲得度指数を3つのグループ（低位、中位、高位）に区分し、就業体験前後の変化

をまとめた（図1）。その結果、全体の傾向として初期キャリア獲得度のレベルが就業体験によって、より獲得度の高いグループに移行することが分かった。



注)「仕事理解」「自己理解」「キャリア積極性」を全8項目の質問(5段階評価)に対する回答をすべて合計した点数(40点満点)を初期キャリア獲得度指数と設定し、その指数の値によって低位(8~24)、中位(25~30)、高位(31~40)とグループ分けした¹⁾。

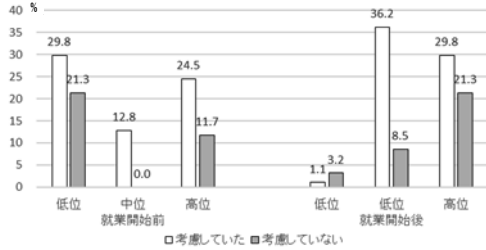
図1 就業体験による初期キャリア獲得度の変化

(2) 大学進学時の就業意識の影響

初期キャリア獲得度を大学進学時の就業の意識（考慮していた、考慮していない）に区分し、就業体験前後の変化をまとめた（図2）。その結果、分かったことを以下に列挙する。

- 就業体験前では、大学進学時で就業意識の割合が「考慮していた」が67%、「考慮していない」が33%であった。大学合格や就職がゴール（目標の目的化）になり、その後のビジョンが描けていないことが懸念される中、約3割の学生が大学進学時に就業を考慮しておらず、大学進学前に将来のキャリアを描くことが課題である。
- 就業体験前の初期キャリア獲得度のレベルの分布については、「考慮していない」が低位グループと高位グループの両極端に偏り中位グループがない。また、低位グループと高位グループの人数比率について「考慮していた」が1.2倍、「考慮していない」が1.8倍と就業を考慮していない方が低位グループの比率が高い。このことから大学進学時で就業意識がある方が初期キャリアの醸成がより早期に展開されると考えられる。

c) 就業体験後では、初期キャリア獲得度のレベルが高くなる傾向がある。このことから就業体験は大学進学時の初期キャリア獲得醸成の遅れを取り戻すと考えられる。



注) アンケート回答で「とてもそう思う」「まあそう思う」を“考慮した”, 「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を“考慮していない”に分類した。

図2 大学進学時の就業意識の改善効果

(3) 就業体験で意識(重視)したこと

就業体験前は低位グループと高位グループの意識したことの傾向はあまり変わらないが、就業体験後はすべての項目で初期キャリア獲得度のレベルが高くなること傾向がある(図3,4)。また、就職先を決める上で重視した項目では条件面よりも社会的意義や能力発揮、教育・研修制度を重視したことが初期キャリア獲得につながる傾向がある¹⁾一方で、今回の調査結果からは、すべての項目において、ほぼ同程度で意識(重視)していることが分かった。

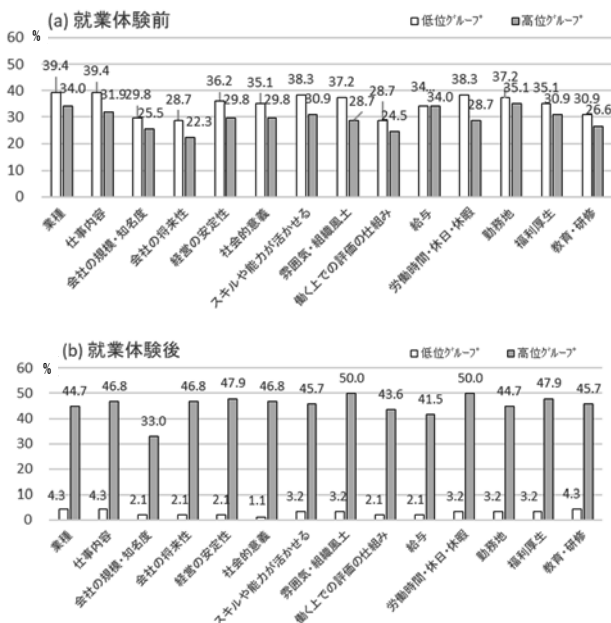


図3 就業体験先で意識(重視)できたこと

(4) 働く目的をもつことができたか

図4は、働く目的を持つことができた人ほど望ましい初期キャリアの要素につながる傾向があ

る¹⁾なかで、分析結果からは「生きがいを見つける」「社会や人の役に立つ」「才能・能力を発揮する」という自己理解面が「お金を得る」「家族の生活」という収入面より若干低かったが(低位グループはよりその傾向が強い)、就業体験後は初期キャリア獲得度のレベルが高くなることに加えて、自己理解面の割合が収入面と同程度以上になる傾向がある。

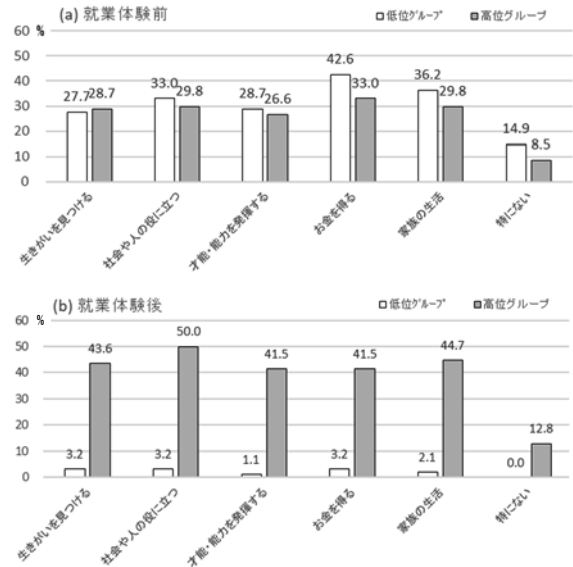


図4 働く目的を持つことができたか

4. 今後の展望と課題

本研究では、就業体験が就職後の初期キャリア獲得度に及ぼす効果を検討した。その結果、就業体験によって初期キャリア獲得度のレベルが高いグループに移行する傾向があることが分かった。このことからインターンシップによる就業体験は初期キャリア獲得度の向上に効果的であるということが分かった。今後は、大学在学中に初期キャリア獲得度を高めるために就業体験の早期化が望まれることに加えて、就業体験以外のキャリア発達に関連する可能性のある研究、部活動、ボランティア、留学など学内外の活動手段にも注目し、多角的に初期キャリア獲得度を向上する調査を実施することが課題となる。

参考文献

1) 若者の就職・転職の在り方に関する研究会：若者にとって望ましい初期キャリアとは～調査結果からみる“3年3割”の実情～, 2018.